

第2章 授業設計と評価の具体的な準備

1. 目標に準拠した評価と授業づくり

≫ 授業の構想を練る要素例

1) 授業設計のための要素例

生徒の資質・能力の育成を目的とした授業では、さまざまな要素を考えに入れながら計画的に授業設計をする必要がある。表1の各要素は例であり、他にも男女共習の問題、生徒数と教員の人数の問題、地域性（武道などに多くみられる）の問題などが考えられる。

表1 授業のさまざまな要素

生徒の資質・能力の育成	
・目標群	・学習評価（観点の評価規準など）
・教材配列，指導計画	・指導対象（学年・人数など）
・指導時間（天候・行事など）	・学習内容（必修・選択など）
・生徒のレディネス	

MEMO -----

2) 第1学年及び第2学年の学習内容の弾力的取り扱い

中学校では、前回の学習指導要領の改訂から、第1学年及び第2学年で学習する必修の学習内容はいずれか一方の学年で履修することが認められている。弾力的取り扱いをすることで、大単元での学習が可能となる。生徒に課題を発見させ、解決に向けた話し合い活動や試行錯誤、新たな課題の発見、他の教材への汎用性など資質・能力を体験的に身に付ける時間が保障できる。

一方、各学年で弾力的取り扱いをしない場合、個々の単元に配当できる時間は十分とはいえない。領域・単元に応じた工夫・改善が大切となる。

3) 教材配列の工夫

保健体育における教材配列は、長期休業、天候（梅雨、秋雨、気温、雪など）、修学旅行などの宿泊行事やその他の行事の時期など、さまざまな影響を受ける。さらにそれらは、毎年同じではない。

学習の効果、生徒の健康安全、学習のまとまりなどを考え、生徒にとって最も学習効果の上がる工夫が必要である。

4) 選択幅の設定

保健体育は、小学校—中学校—高等学校の12年間を、小学校1年～4年の「各種の運動の基礎を培う時期」、小学校5年～中学校2年の「多くの領域の学習を経験する時期」、中学校3年～高等学校3年の「運動・スポーツを継続できるようにする時期」の4年ごとに区切

った領域構成をしている。この趣旨を踏まえて選択幅や選択種目の設定をすることが大切である（表2）。

設定にあたっては、選択する生徒数、指導する教員数、施設・用具などを考慮し、適切に設定する。

≫ 目標設定と目標に準拠した評価の手順

目標に準拠した評価において、その出発点となるのが「目標群」である（p.18 図1）。保健体育科で最も上位の目標は、「保健体育科の目標」である。この目標を達成するために、教材配列（学習する単元の順序）や配当時間が決められ、より具体的な下位の目標が設定されなければならない（p.18 図2）。

≫ 年間指導計画を作成する際の留意点

年間指導計画には、その学校の保健体育に対する考え方が表れる。学校教育目標の実現の一翼を担っているという自覚や、学習指導要領に示されている保健体育科の目標を意識することが大切になる。

自校の生徒の実態や地域性から、どの領域・単元をいつ頃、どのくらいの時間をかけて学習し、その結果、生徒に育成すべき資質・能力がどのくらい身に付くのかを考えなければならない。

生徒の実態がそれぞれ異なることから、その学校独自の年間指導計画を作成することになる（p.22～25 図3）。中学校で計画を立案する際は、小学校での学習内容、技能の習得状況などの把握が不可欠である（レディネスの把握）。近年、小中学校の連携活動が盛んに行われているが、このような情報交換も内容に加えるとよい。

MEMO -----

表2 発達段階による保健体育の学習内容

4年間		4年間		(高校3年間を含む) 4年間	（中3～高3は選択制）
各種の運動の基礎を培う時期		多くの領域の学習を経験する時期		運動・スポーツを継続できるようにする時期	
小1・2年	小3・4年	小5・6年	中1・2年	中学校3年	
体づくりの運動遊び	体づくり運動		体づくり運動	A 体づくり運動	
器械・器具を使った運動遊び	器械運動		器械運動	B 器械運動	
走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動	陸上競技	C 陸上競技	
水遊び	水泳運動		水泳	D 水泳	
ゲーム		ボール運動	球技	E 球技	
			武道	F 武道	
表現リズム遊び	表現運動		ダンス	G ダンス	
			体育理論	H 体育理論	
		保健	保健	保健	